

議長	局長	次長	係長	事務局員

復命書

平成31年1月22日

三沢市議会議長 小比類巻 正規 殿

基地対策特別委員会

委員長 船見亮悦

副委員長 瀬崎雅弘

委員 佐々木卓也

委員 下山光義

委員 遠藤泰子

委員 澤口正義

委員 小比類巻雅彦

委員 森三郎

議長 小比類巻正規

随行員 中村容三

〃 高橋涼平

平成31年1月16日（水）から平成31年1月18日（金）まで、沖縄県宜野湾市において、当委員会の行政視察を実施したので、その概要について、下記のとおり復命いたします。

記

視察概要－1【在日米軍普天間基地】

- 1 日 時：平成31年1月17日（木）午前10時00分～11時30分
※宜野湾市議会バス利用。同日9時30分に宜野湾市役所出発
- 2 場 所：在日米軍普天間基地（沖縄県宜野湾市）
- 3 対応者：
在日米軍海兵隊 副司令官 スティール 大佐
調整役：米国海兵隊在沖海兵隊バトラー基地 田 場 小百合 渉外官
同行者：宜野湾市議会 議長 上地 安之
同 基地特別委員長 知名 康司
〃 事務局長 東川上 芳光
運転手：宜野湾市上下水道局 企画係長 玉 元 智
- 4 視察項目：
(1) 普天間飛行場の概要について
(2) 普天間基地内見学
- 5 視察概要：下記のとおり

（1）普天間基地の概要

- ① 敷地面積…普天間基地の施設面積は、約 4.7 km^2 （東京ドーム100個分）あり、施設敷地内には滑走路と必要最小限の施設しかない印象を受けました。また、三沢基地の約 16 km^2 （天ヶ森含まず）と比較すると、かなり狭い状況であったため、基地に隣接している市街地においては、滑走路が非常に近くになっており、騒音も大きく、危険性も高いとのことでした。
- ② 基地の沿革…スティール副司令官（米軍側）の説明によると、終戦直後の普天間基地周辺は、集落が点在し、田畠や松林が広がるのどかな丘陵地であったものの、戦後の普天間飛行場の整備に伴い、基地周辺を囲むように宅地化や市街地化が進んだため、現在では、普天間基地が宜野湾市のほぼ中央に位置しており、ドーナツ状に市街地が形成されているとのことでした。
- ③ 基地の特徴…そのほかの特徴としては、三沢基地（元日本海軍跡地）とは違い、普通に暮らしていた土地を米軍に占領された経緯から、普天間基地の敷地のうち約9割が民有地であり、地主3,678人に対して、年間約73億5,900万円の賃借料が支払われているとのことでした。

- ③ 軍人・軍属…普天間基地に配属されている軍人・軍属は約 3,200 名で、そのほとんどが 20 代の海兵隊となっており、約 3 年で異動となっていることから、常に若い海兵隊が駐屯しているとのことでした。なお、日本人基地従業員は 208 名とのことで、基地内に商業施設や娯楽施設が少ないためなのか、三沢基地と比べて日本人従業員も少ない状況にありました。
- ④ 常駐機…普天間基地は、海兵隊の飛行場であるため、常駐機については、オスプレイやヘリコプターなどの輸送機が中心で、その概要は以下のとおり。

MV-22B	(オスプレイ輸送機)	24 機
CH-53E	(輸送用ヘリ)	12 機
UH-1Y	(汎用ヘリ)	6 機
AH-1Z	(攻撃用ヘリ)	12 機
UC-12W	(輸送機)	1 機
UC-35D	(輸送機)	3 機

(2) 普天間基地の見学

普天間基地の概要説明の後、スティール副司令官の案内による基地内の見学及び基地概要の説明がありました。基本的な基地施設については、三沢基地と似ているイメージを受けましたが、敷地内には古い時代の遺跡が点在しているとともに、もともと民有地であったため、地域住民の墓地や、この辺りの神社や祠にあたる参拝用施設などもあり、行事がある時期などには、当該施設がある区域を地域住民に対して開放しているとの説明もありました。

視察概要－2【沖縄県宜野湾市】

1 日 時：平成31年1月17日（木）午後1時00分～14時45分

2 場 所：宜野湾市役所3階 第3常任委員会室

3 対応者：宜野湾市基地政策部基地涉外課 吉村 純 係長

〃 〃 まち未来課 東江信治 係長

〃 〃 〃 高良 夏美 主事

4 観察項目：(1) 貴市における基地の概要について

(2) 普天間飛行場の跡地利用計画の概要について

5 観察概要：

(1) 観察にあたっての挨拶

宜野湾市 副市長 和田 敬悟 氏

宜野湾市議会議長 上地 安之 氏

三沢市議会基地対委員長 舟見 亮 悅

※宜野湾市側あいさつの概要（宜野湾市の紹介）

宜野湾市は、沖縄県本島中南部の東シナ海に面し、那覇市から北に 12 km、沖縄市から南に 6 km の地点に位置しており、市域は、東西が 6.1 km、南北が 5.3 km のやや長方形で、市の中心部及び北部には米軍普天間基地があり、その面積は市内全域の約 32% を占めています。

普天間基地が市の中心部に位置するため、市街地が、国道、県道沿いにドーナツ状という特異な形状を示しており、近年では、那覇市の外延的な拡大に伴って市街地化が発展し、さらには沖縄国際大学、琉球大学が立地し、沖縄コンベンションセンターが整備されるなど、県内の高次都市機能の一部を担う重要な地域となりつつあります。

(2) 貴市における基地の概要について

基本的な普天間基地の概要については、在日米軍海兵隊副司令官からの説明と同じような内容であったが、宜野湾市での説明では、米軍側の説明とは違い、普

天間基地の概要だけでなく、当該基地の所在に伴う宜野湾市内の危険性や騒音問題のほか、ほとんど進んでいない普天間飛行場の返還問題についても、説明がありました。

① 普天間飛行場返還問題の主な経緯

- 1996年12月 SACO合意（代替施設完成後に普天間飛行場返還）
- 2004年 8月 沖縄国際大学に米軍ヘリが墜落
- 2006年 5月 代替施設（辺野古基地）2014年完成を目標で合意
- 2012年10月 MV-22オスプレイの配備開始
- 2013年 4月 日米両政府で返還時期を2022年またはその後と公表
- 2014年 8月 普天間所属の空中給油機15機が岩国基地へ移駐完了
- 2017年 7月 普天間基地東側約4ha部分の返還
- 2017年12月 米軍ヘリの窓が普天間第二小学校に落下

② 基地から派生する被害

ア 騒音被害…県と市において市内8か所に騒音測定器を設置して観測

- 騒音発生回数（環境騒音+10dB以上）H28年度約11,000回
- 夜間騒音発生回数 H28年度約250回
- 市民からの苦情（基地110番）件数H28年度414件

イ 地デジ受信障害…全国的に、地デジ移行後はテレビの受信障害はなくなり、 先般、会計検査院からの指摘により防衛省でのNHK受信料の 助成が廃止となつたが、宜野湾市では現在でも地デジ障害が発 生しているとの苦情が多いことから、未だにNHK受信料の助 成が継続しており、その対策についても国において調査中

ウ 墜落等の危険性…普天間飛行場所属機による事故は、これまで135回あり、 年間で約2.9回の事故等が発生しているとのこと。

（3）普天間飛行場の跡地利用計画の概要について

沖縄県と宜野湾市は共同で、平成18年に『普天間飛行場跡地利用計画基本方針』を、平成19年には『普天間飛行場跡地利用計画の策定に向けた行動計画』を、それぞれ策定し、当該計画をもとに共同調査や関係者との合意形成に取組み、

平成24年度に『全体計画の中間とりまとめ』を策定したことです。

当該計画では、現在の普天間飛行場による街の分断を解消するために、普天間基地跡地を縦に貫く中部縦貫道路と、横に伸びる宜野湾横断道路を整備するとともに、公共交通である鉄道も整備し、市民だけでなく沖縄県民全体の利便性向上を目指しているとのことでした。

また、普天間飛行場跡地は、視点を世界に広げてみると、東アジアと日本本土の中心に位置しているという地理的特性があるため、今回の跡地利用にあたっては、沖縄振興の発展はもとより、日本経済の起爆剤になるものと確信し、日本経済の成長の一翼を担うフィールドへと新しく生まれ変われるよう、未来ある跡地利用を目指し、平成29年に普天間未来基金を創設して、跡地利用に伴う将来の財政需要に備えているとのことでした。

① 全体的なイメージ

普天間飛行場跡地の計画策定にあたって、宜野湾市では、世界的に経済や観光において成功している都市であるシンガポールやケアンズを参考として、緑豊かな環境を保全しつつ、自然エネルギーを活用した街づくりに取組むことにより、緑の中でリラックスして想像力を高める先端技術の研究所などを呼び込み、産業を生み出す計画にしているとのことでした。

② 北部エリア

普天間飛行場跡地の北部エリアでは、歴史・文化（沖縄らしさ）を活かしたコミュニティ、環境共生（沖縄の風土）を活かしたコミュニティ、国際交流貢献（沖縄振興の舞台）となるコミュニティの3つをコンセプトとして、歴史・文化地区では、遺跡や祭りをよみがえらせて公園として整備し、当該地区をまちの軸としてコミュニティが生まれることをイメージしているとのことでした。

次に、環境共生地区では、沖縄の自然とうまく共生してきた先人たちの知恵を活かしながら、その役割をつないでいくコミュニティをつくることをイメージしているとのことで、最後に、国際交流貢献地区では、西普天間住宅地区と連携した新しい街に、世界からの人々が集い、人々の夢がふくらむ街づくりをイメージしているとのことでした。

③ 南部エリア

南部エリアでは、沖縄の風土（自然環境との共生）と、沖縄振興の舞台（国際交流・産業振興）の2つのイメージをコンセプトとし、沖縄の風土地区では、地下に流れる水の道、起伏のある地形、跡地内にある緑、先人たちの文化・歴史を活かしながら、地下水を利用した水の道に沿った緑の道や、馬場公園を整備し、周辺環境と溶け合う街をイメージしているとのことでした。

また、沖縄振興の舞台地区では、緑の中にリラックスして想像力を高める先端技術の研究所を呼び込み産業を創出するとともに、文化ホールなどの整備などによる人々が集まり、住む人、働く人、楽しむ人、学ぶ人がともに語らう緑の中の街をイメージしているとのことでした。

④ 中央エリア

中央エリアでは、北部や南部と共通のイメージも含め、沖縄の風土（自然環境との共生）と、歴史・文化を活かした沖縄らしさ、沖縄振興の舞台（国際交流・産業振興）、自然エネルギーの活用（環境配慮型都市）の4つのイメージをコンセプトとしているとのことでした。

このうち、沖縄の風土（自然環境との共生）区域では、跡地に残る緑を保全し、周辺の湧水を守るための自然の森や、公園緑地として整備することとしているとのことでした。

次に、歴史・文化を活かした沖縄らしさ区域では、並松街道を再生した歴史の見えるまちづくりや、かつての集落地域には沖縄らしい風景が広がる住宅地をイメージしているとのことでした。

沖縄振興の舞台（国際交流・産業振興）区域では、大きな公園の中にサイエンスパークと、国際貢献等の中核施設が建ち並ぶ、沖縄の自立発展につながるエリアをイメージしているとのことでした。

最後に、自然エネルギーの活用（環境配慮型都市）区域では、古くからある沖縄特有の『省エネの知恵』を活かし、沖縄らしさのある地球環境に配慮した環境共生型のまちづくりをイメージしているとのことでした。

※このような計画の実行により、宜野湾市では現在の直接経済効果120億円から3,866億円（32倍）になると、見込んでいました。

(4) 所感

今回、三沢市と同じように米軍基地を抱える宜野湾市を訪問し、先進地観察を通じて感じたことは、基地に対する考え方や捉え方が、三沢市とは全然違っているということでした。

まず、そもそも歴史的な背景として、三沢市の場合は旧日本海軍の基地を利用して米軍基地が整備されたのに対し、宜野湾市では、自分たちの住んでいた場所を米軍に占拠されたという思いがあり、そもそも基地に対する嫌悪感があったこと。

次に、宜野湾市では普天間基地の面積が狭く、滑走路と市街地が近接している状況にあるため、航空機の騒音が大きいことはもちろん、市街地や学校等を巻き込む航空機による事故も多いため、市民における航空機事故への恐怖感が三沢市よりも大きいように思われたこと。

更に、普天間基地の従業員は、基本的に3年で入れ替わっている状態にあるため、常に20歳代の海兵隊員が駐屯しており、米軍による事件や事故が三沢市と比較して多いとのことで、更に基地に対する悪いイメージが強いように感じました。

更には、三沢市においては、米軍だけでなく自衛隊も駐屯しているため、基地交付金等による予算的な問題だけでなく、三沢市の人口が増えているなどのプラスのイメージがあり、基地を返還してほしいという意見よりも、そのまま基地と共に存し、または増強を望むような意見があるのに対して、宜野湾市では、基地用地を重要な土地資源として捉え、基地用地が返還された場合には、直接的な経済効果も現在の120億円から3,866億円（32倍）になるような計画を策定しており、できるだけ早い時期での基地返還を望んでいるような状況でした。

三沢市においては、宜野湾市と社会情勢や歴史的背景、基地の性質（三沢市は米軍・自衛隊・民間航空機の3者利用）が異なることから、そのまま宜野湾市の政策を見習うことはできないと思われたが、一時期と比較して米軍従業員が減少していることや、現在でも、あまり利用されていない土地がないのかを調査し、基地としては不要な土地で、三沢市民として利用したい土地がないのかなど、今後の検討において見習うべき部分もあったと思われました。

[基地対策特別委員会行政視察（普天間基地内）写真 P 1】



普天間基地内

視察時全景①



普天間基地内

視察時全景②



普天間基地内

視察時

集合写真

[基地対策特別委員会行政視察（沖縄県宜野湾市）写真P 2]



宜野湾市

視察時全景①

和田副市長

あいさつ



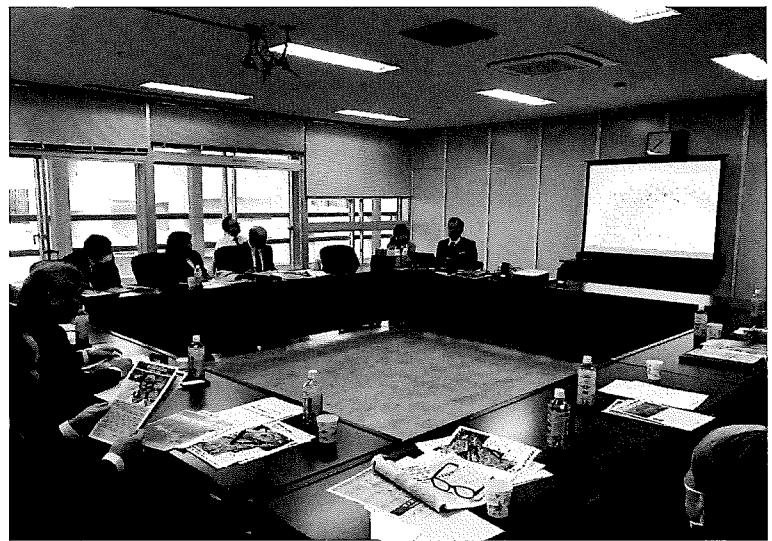
宜野湾市

視察時全景②

基地政策部

基地涉外課 係長

吉村 氏 説明



宜野湾市

視察時全景③

基地政策部

まち未来課

まち未来係 係長

東江 氏 説明